

開 会 挨 拶

愛知大学人文社会学研究所所長

伊 東 利 勝

皆さま、本日はお集まりいただきまして有り難うございます。とりわけご報告をいただく3人の先生方におかれましては、ご多用中にもかかわらず遠路はるばるおいでいただきまして、深く感謝いたしております。

私どもの研究所は、まだ新しく、やっと3年目に入ったところです。前身に文學會という組織がありましたが、活動の幅を広げるため研究所に改編しました。ひとつには基礎研究の名のもとに、真・善・美を追求すると称して、古い学問の殻に閉じこもることを避けるためです。人文学のなかにあるいろいろな概念や考え方、パラダイムやカテゴリーなどは、自然に出来上がったものは存在せず、いろいろな権力が働くことによって形成されていることを、先ずは明らかにすべく活動を開始しました。

例えば、「民族 (nation)」ですが、いっけん自然化されているこの用語は、「近代的な主体」の確立を推し進めた力の発動と表裏一体となって形成されてきたと考えられます。18世紀後半から、主として西ヨーロッパにおいて、基本的人権の尊重ということで形成された市民社会は、国民国家を成立させました。そして王国を倒して出来上がったこうした国家は、住民の「国民化プロジェクト」を通じて、「民族」の創生をうながしてきたのです。はやい話、英語の nation が現在の意味を持ち始めたのは16世紀からで、日本語の「民族」は、明治以降に作られた言葉であることが、このことを如実に示しているといつてよいでしょう。

そして、私たちのなかに「国民」や「民族」の一員という自覚が形成されるについて大きな役割を果たしてきたのは、何ととっても近代歴史学です。国民統合のために不可欠な「共

通の記憶」を、住民のなかに作り上げることは、「王統史」や「縁起」ではでおこないえません。近代の歴史学は国民国家の成立とともにできあがり、その形成に奉仕してきました。私たちが記憶するよう迫られてきたのは、そうした歴史の形成に必要な特定の過去にしかすぎません。

しかしこうした過程を明らかにしてくれるのも、また歴史学であることも確かです。かつてこの愛知大学文学部には史学科があり、そこには「東洋史」という専攻がありました。ところが1990年代になると、「東洋史」という名前や研究方法では、学生が集まらなくなります。2005年にこれを「アジア史」に変え、東南アジアや中央アジア・インドまでも対象に含んでいることをアピールしましたが、「東洋史」がもたらした難題を解決することはできませんでした。専攻存立の危機に直面し、ここは旧態依然たる学問の方法を抜本的に変革し、あわせて時代の要請にこたえるべきと判断し、2011年に「世界史学」という専攻を立ち上げました。

このとき、もっとも意識したのは、各国史の寄せ集めとしての世界史、つまり高校で教えられているような「世界史」とは違う、「世界史学 Transnational History」なる学問の方法を模索することです。スタッフ数も限られていますので、私の専門は中国史だ、ミャンマー史だなどといっていられない事情もありました。しかし最大の理由は、世に「グローバル・ヒストリー」と銘打って、交渉史や地域史、比較史など、一国内の出来事にとらわれない歴史が描かれています。世界市民の形成に望みを託すものや、けっきょくは一国史つまりナショナルヒストリーに回収されてしまっているものが少なくなかったからです。

さしあたりは、中国史とかフランス史とか東南アジア史とか、近代以降に作られた枠で、過去を描きださないようにしなければなりません。それに「中国史の基本」とか、近代以降ならまだしも「ミャンマー史の基礎」とか、さらには「世界史の基本法則」といういい方にも注意を向けるようにしました。「世界史の基本用語」という考え方も、問い直してみる必要あります。実証史学の名のもとに、自らの政治性を不問に付し、あるひとつの歴史像

を特権化しないために、こうした言説に対して批判的でありたいと考えているところです。

めざすは、世界各地における過去の事例を題材にしつつ、現代社会にとって意味ある歴史を描くことです。歴史は、現在から過去を見た時に出来上がるものであり、その視線が現代社会の制約下にあることは申すまでもありません。その意味でも、まずは現代人にとって至高のアイデンティティであるネイションによってつくられる思考の枠が問題になります。このナショナリズムが具体的にどのような場面で、如何にして歴史叙述を拘束しているかを私たちは自覚する必要があると思っております。それはこれまでに描き出された過去に、もう一つの過去があることを示すことによってしか果たしえませんが、

ナショナルヒストリーに囚われない歴史学ということになれば、いきおい世界的レベルで生じている特定の問題に根差した歴史研究ということになるのでしょうか。グローバリズムという概念、ジェンダー、環境問題、民族差別・紛争、宗教戦争、空間区分、人の識別方法などがいかにして生じたかを紐解き、まずは当該問題の所在と、これらを引き起こす現代社会のイデオロギーを相対化する。そして特権化されているナショナルヒストリーを脱構築したい。とはいえ、そのようなことだけでよいのかという不安もあります。

本日は個別の歴史事例に基づき、現代の歴史学一般がかかえる問題をあぶり出すための新しい「世界史学」の確立に向けて、いろいろな糸口を提供していただくことになっております。このように歴史を描くと、これまでみえていなかった過去や現代社会のあり様が明らかになる、というようなことをお示しいただくものと、我われとしては非常に期待をしているところです。

この後、最初に趣旨説明があり、次いでお二人の先生によるご報告、そしてこれに対するコメントと続きます。最後に、質疑応答の時間がございますので、ぜひフロアにいる皆さま方から、新しい「世界史学」、新しい世界の歴史というものについて、もちろんそれに限らなくてもいいわけですが、ご登壇いただく先生方に、いろいろご質問いただければと

思います。

それでは長時間になりますけれども、どうかよろしく願いいたします。